第７４回　経営協議会 議事要録

日　時　　令和３年１月２８日（木）１３時３０分～１４時１５分

委　員　　澤　和樹 学長【議長】
安良岡章夫 理事・副学長
日比野克彦 美術学部長
杉本和寛 音楽学部長
桐山孝司 大学院映像研究科長
熊倉純子 大学院国際芸術創造研究科長
遠山敦子 委員、福井俊彦 委員、滝　久雄 委員
谷口維紹 委員、冨田哲郎 委員、二宮雅也 委員

陪　席　　浜田健一郎 監事、上田良一 監事

清水泰博 理事・副学長、麻生和子 理事、松岡正和 理事・副学長・事務局長
岡本美津子 副学長、籔内佐斗司 副学長、八反田弘 副学長
佐野　靖 学長特命（社会連携担当）
箭内道彦 学長特命（広報・ブランディング戦略担当）
秋元雄史 大学美術館長
河野文昭 演奏芸術センター長

欠席者　　福本ともみ 委員
国谷裕子 理事
桂英史 附属図書館長

議題

１．国立大学法人ガバナンス・コードに係る東京藝術大学の適合状況等の報告について

議長から標記のことについて提案があり、審議の結果、概ね原案どおり承認されたが、各委員からの意見を踏まえた上で、最終的に役員会にて纏め上げることで一任いただくことが了承された。

（主な意見）

・学長のリーダーシップが問われている中で、現在の藝大の学長の職務遂行については、ビジョンを明確にして自らイニシアティブを持って活動されて全学を率いており、リーダーシップを発揮されている。

・また、コロナ禍で若手芸術家が大変苦慮している状況の中、若手芸術家支援基金を立ち上げ、実質的な援助をされていていることで、若手芸術家から大変喜ばれていると聞いている。

・ガバナンスコードについては、大学の教育研究機能を強化するための膨大な資料作成についての苦労が感じられる。果たして何のために行うものなのか、文部科学省や内閣府に対しては、大学の教育研究機能の質を向上させていくため、どのようなガバナンスが必要かという要素を精選して、それに対する各大学の動きを把握するようにされた方が良いのではないか。このような膨大な作業とならないよう強く期待したいので、今回の発言を藝大からお伝えいただきたい。

・学内の人事権の問題について、学長が時代の流れに合わせて学内改革した人事配置をしようにも、現状の学内の人事権問題もあり難しいとことではあるが、是非とも検討いただきたい。

・藝大はこれから益々世界的に見ても特色ある大学にならなければならない時代であると感じている。コロナ後は益々リモートワークの時代となり、ＡＩやロボティックスが大きく前進する時代と言われており、深い人間性を伴った世界にしていくには、藝大の重要性は一層増してくるのではないか。そういった意味で形式的にガバナンス

・コードで満たしていくのではなく、新しい解釈を加えながら一歩も二歩も前進していく姿勢を毎年強く出していくことが必要である。
・法人化後、大学の特性や多様性を謳いながら、一方で今回のようにガバナンス・コードで一律に各大学をチェックする仕組みを文部科学省や内閣府が作成しているが、ガバナンス・コードよりも必要なものがあるのではないか。
・芸術が持つ力をこれから日本がどう発信していくか、日本が文化国家として更に発展するための重要な礎になるのではないか。
・藝大の特性を生かして他大学と一緒になり新たな文化を創造していく姿勢が重要で、限られた資源の中で藝大は学長のリーダーシップを発揮されている。ただ、限界もあり藝大では難しいところをサポートするのが、国や社会ではないか。
・最近はイノベーション・エコシステムということが言われおり、大学をより良くしていくには大学だけでなく、産官学での知の循環・資金の循環を活発にしていくことで新しい大学改革ができるのではないか。
・大学のガバナンス・コードについては、管理的・静的なガバナンスを取り上げていると感じられるが、その上の動的なガバナンス（時代変化にどう対処していくか）について大学がどう考えるかを表現して評価していくべきである。今のガバナンスは非常に偏っていると感じるので、藝大から問題意識を提起していただきたい。
・企業でのコーポレート・ガバナンスについては、ガバナンス・コードに対してコンプライ・オア・エクスプレイン（遵守、さもなくば説明）が求められている。従えないものについては、きちんとした説明・表記をしているため、大学のガバナンスについても各大学が特色を持って各々の説明を表記していくことがガバナンスの本来の意味を果たすのではないか。これから先の時代が何を求めているのか、それに対して大学がどのように対応するのかを含めて表明することが望まれるのではないか。
・企業のコーポレート・ガバナンスで求められているのは、企業が自らが持続的に存在していくため、今はSDGsやESGの観点からの社会の要請が明確にでているので、その要請に対してしっかりと対応して社会の信頼と共感を得ることが必要だと思われる。企業の経済的成長と社会課題の解決の両立を実現していくことが企業には求められているため、このガバナンス･コードは最低限必要な内容を一律に求めた行動基準であり、決してガバナンス・コードが目的ではないと思われる。従って独自のビジョン、あるべき姿を定めて自ら改革をして情報発信をしていく必要があるのではないか。企業では旧来の財務情報ではなく、非財務情報の価値が高く求められている中で、このコロナ禍において、生きる上で芸術分野が極めて重要な価値観であることがはっきりしたので、藝大としては社会との連携事例等も含めて社会的な存在価値・意義を発信していくべきではないか。

報告及び連絡事項
１．令和元年度に係る業務の実績に関する評価結果について
　標記のことについて、荻原戦略企画課長から資料に基づき報告があった。

２．その他
・本学の取組みについて
○ 澤学長から、芸術文化における本学の近況について報告があった。
（本学の取り組み）
・2020/10　「藝大アーツイン丸の内2020」が東京丸の内・丸ビルで開催
・2020/12　「澄川喜一先生 文化勲章受章記念講演」を開催
・2021/1　Tokyo Geidai⇄Asia2021（東京藝大インタラクティブアジア月間）開催
（受賞等）
・2020/11　ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー派遣第二期生は坪井夏美さん（大学院音楽研究科）に決定
・2020/12　保健管理センター内海健教授 大沸次郎賞を受賞
（東京藝術大学若手芸術家支援）
・2020/9　「アート･ルネッサンス支援プログラム～芸術の新たな『ふれあい』を創ろう」の募集
・2020/12　「アート･ルネッサンス・コンンサートin藝大～若き音楽家たちにエールを～」特別演奏会を開催
・2020/12　東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト2021の公募開始